デューイと池田大作氏の教育目的論についての一考察

原　青林
大江平和　訳

要旨：池田大作氏とデューイの教育目的論は大きな比較可能性を有している。すなわち、第一に、両者は児童の成長と幸福を、教育における最も重要な目的としていること。第二に、両者は既存の教育の弊害への批判をふまえて提起していること。第三に、両者は現代の教育に重要な影響を及ぼしており、なおかつ、両者の間には、ある種の発展的な関係が見られることである。池田大作氏の教育目的論は、デューイの教育目的論を現代に展開したものと言える。

はじめに

ジョン・デューイは、近代アメリカの著名な哲学者であり、教育者であります。彼の教育思想は、１９１６年に出版された大著『民主主義と教育』にまとめられていますが、デューイは教育思想家であるとともに、教育実践者でもありました。彼が１８９６年に創設したシカゴ大学実験学校は、彼が教育の諸問題を実験し研究に取り組むための拠点となり、その教育思想の形

講演する原青林氏。肇慶（ちょうけい）学院は広東省肇慶市にある総合大学

成に多大な影響を及ぼしました。池田大作氏は、現代日本における著名な社会活動家であり、教育家であります。池田氏の著作や講演には透徹した教育思想が輝きを放っています。池田氏はまた独自の教育思想や理念をもって自ら行動に移し、幼稚園、小学校、中学校から大学にいたる創価一貫教育の体系を創立しました。実質面から見ると、デューイの民主主義教育思想と池田氏の平和的な調和のとれた教育思想には、明らかに比較可能性が存在しています。本稿では、両者の教育思想における教育目的論について比較と分析を行ってみたいと思います。

1　デューイの教育目的論

デューイの教育思想には大要、教育本質論、教育目的論、教育教材論、教授論などいくつかの主要な思想が含まれています。なかでも、教育目的についてデューイは多くの紙幅をさいて論じています。デューイは「教育そのものには目的はない。目的をもっているのは、ただ、人びと、両親、教師たち等々であって、教育と

いうような抽象的観念ではない」と述べていますが、この言説は、教育目的の主体についての一提示にすぎません。実際、彼の哲学や教育理論のなかで、デューイは明確に哲学上の目的と教育目的の存在を認めています。デューイの教育目的を検討するにあたり、鍵となるのは、デューイがいかなる目的を支持し、いかなる目的に反対していたのかを明らかに区別することであります。

デューイは外的で、固定的で、究極的な教育目的に反対しました。外的な教育目的は、児童の興味を引き付け、ニーズを満たすことはできないし、固定した目的は、柔軟性に欠け、変化をともなう具体的な状況に適用することはできません。また、究極的な目的は、ある種、理論上の虚構である、なぜならば、世界は絶えず変動しているからであるというのです。また、デューイは明確に次のように指摘しています。「教育的過程は、それを越えるいかなる目的ももたない。それはそれ自体の目的である」「教育はすべて成長と一体のものである。教育は、それ自体を越える目的をもたない」と。このように、デューイは、実際に「成長」を教育の目的としたのです。(1)

デューイが、成長こそ教育目的であると主張したその主なねらいは、児童の発達に対する外的な要素からの抑圧に反対することにあり、児童の興味やニーズを尊重することにありました。そして児童に、教育そのものから、あるいは成長の過程から、楽しみを獲得させようとしたことにあります。周知の通り、教育の目的は「教育はある社会にいかなる人間を育成するのか」という問いに答える必要があります。デューイの「教育は成長のためにある」という説は、児童の発達過程という視点から教育目的を規定したものであり、それは教育目的の本質的な属性を映し出してはおらず、教育目的が明確化すべきものも示してはいません。加えて、人々に、確実に実行可能な目的をも打ち出してはいないのです。

それでは、デューイはいったい、いかなる社会のために、いかなる人間を育成するのか、という問いについて論じたことはあったのでしょうか。

『民主主義のための教育』

社会改良主義者の一人として、デューイは教育の社会的目的を覆い隠すことはしませんでした。彼は「教育の社会的目的」（1923）、「教育の方向」（1928）、「教育と新しい社会理念」（1936）などの論考のなかで、教育目的の社会性について検討し、教育に対し社会に奉仕することを求めました。彼の社会的理想は民主主義であり、この民主主義とは、アメリカ資本主義の発展過程における産物です。デューイが、教育に対し社会への奉仕を求めたこと、それはまたブルジョア階級の民主主義制度を完璧なものにするために奉仕しなければならないということでもありました。それゆえに彼は、教育の社会的機能をことさらに強調したのです。もし教育がなければ、民主主義を維持していくことは不可能であるし、民主主義の発展などさらに言うに及ばないでしょう。教育は民主主義のためにあり、民主主義の手段でなければならないとしたのです。

デューイの民主主義という理想は、個人が十分な自由を獲得することも求めました。彼は次のように考えました。「きわめて多様な個人的能力の解放は、民主主義を特徴づけるものである。個人の発展と民主主義という社会の目標は一致するものであり、民主主義という旗印のもとでは、個人と社会との対立、個人本位論と社会本位論との対立は解消される。個人の十分な成長と発展は、民主主義の要求であり、体現であるばかりでなく、民主主義が維持され、発展していく保障でもある」と。デューイの教育に関する論述からは、人間の育成について、おもに次の四つの資質が強調されていることがわかります。第一に、良き市民という素質をもつこと。民主的な理想や民主政治および生活に参加できる能力をもつこと。第二に、幅広い職業的素質をもつこと。ある職業に従事することを通じて個人の能力を開花させ、社会に貢献できること。第三に、科学的思考法を把握すること。現実問題を解決する能力をそなえ、つねに変動し続ける社会に適応できること。第四に、良好な道徳的品行をもつこと。個人と社会の関係をうまく処理でき、社会のために奉仕すると

デューイは中国にも2年間滞在し（1919～21年）、中国の教育思想に大きな影響を与えている。中央がデューイとアリス夫人（1920年5月、南京）

いう精神をそなえること。[2] これらの素質には、明らかにデューイが教育を通じて民主主義的な意識を体現した新しいタイプの人間を育成し、それを通じて社会変革を図ろうとした、一貫した考えが反映されています。

道徳教育について、デューイはそのおもな目的は、個人と社会の関係をうまく協調させることにあると考えました。デューイは社会と個人を切り離すことに反対しましたが、それはおもに彼の個人主義的な思考の面に表れています。アメリカ社会のなかで、個人主義はきわめて重要な位置づけにあります。古い個人主義は、たんに個人の独立性、独創性と意志力を強調し、個人の自由に対する政府の抑圧に反対するだけでした。アメリカが農業社会から工業社会へと転換を遂げるにともない、古い個人主義は、ついには自由放任主義に流れつき、経済および政治生活が、しだいに無政府主義に向かっていくなかで、社会統制はバランスを失っていきました。それゆえに、デューイは個人主義の弊害に対する痛烈な批判をふまえて、いわゆる新しい個人主義が古い個人主義に取って代わることを求め、新

しいタイプの知性、情操、個性が涵養されることを求めたのです。デューイによれば、教育とは新しいタイプの個人を育成することであり、その個人とは、私的な利益だけを追い求め、公的な利益を顧みないような人間ではなく、頭が硬直した、旧来のしきたりに固執するような人間でもありません。それは、社会性と知性の役割を重視し、協力的な精神をそなえ、科学的な方法を活用し、社会の改善を図っていく人間のことなのです。[3] デューイは、このような新しいタイプの個人主義的な性格をそなえた人間の育成を通じて、資本主義制度が改良され、社会の矛盾が緩和されることを望んだのです。

2　池田大作氏の教育目的論

池田大作氏は、教育目的について透徹した論述を行っています。池田氏が数多くの著作のなかで教育に論及するときに、最初に明確に提起するのは、往々にして「何のための教育か」という問いかけです。教育とはたんなる知識の伝授にとどまらず、より重要なのは、人間の能力と質を高めることであるというのです。人間の能力と質を高めるとはどういうことか、という問題について池田氏は、「人間としていかにあるべきか、人生をどのように生きるべきかという、人間にとって不可欠の問題を解明し、解答を与えるところに、その根本的課題があると思うのです」と力説します。それゆえに池田氏は、教育の究極的な目的は人をつくることにあり、人間にとって、知性を磨き、知識を豊かにすることはもとより重要なことであるけれども、倫理や道徳の面における修養は、それにもまして必要不可欠なものであると論じています。[4]

池田氏は次のように述べます。「教育の目的が〝知の創造〟であることはいうまでもない。その一貫として知識を教えることも当然に大切な使命といえる。しかし、知識そのものが、人間の生き方、人間としての在り方に直接影響を与えるのではない。知識が人間に対して創造的に働きかけてくるのではなく、人間が知識をどう活用し使いこなすか、つまり人間の知恵によって創造性を帯びてくるものである」と。そして、人間

の知恵とは「人間としてどうあるべきか」を体得することでもあるとします。[5] ここで役割を果たすのは、人間の正しい価値判断と意志の力です。教育の根本的理念はたんに知識の伝授にとどまらず、「人間としての理想」を教え導き、育成していく必要性を確認しなければならない理由はここにあると言えるでしょう。

功利主義的教育を超えて

池田氏は次のように鋭く指摘します。「現代の教育が実利主義に陥ってしまっているのは、悲しむべきことだ。こうした風潮は、二つの弊害をもたらしていると思う。一つは、学問が政治や経済の道具と化して、その本来もつべき主体性、したがって尊厳性を失ってしまったこと。もう一つは、実利的な知識や技術にのみ価値が認められるために、そうした学問をする人びとが知識や技術の奴隷に成り下がってしまっていることである」[6]と。さらに池田氏によれば、教育について言えば、確かにそこから大きな実利的効果を得ることができるけれども、これはあくまで結果として自然にもたらされたもので、教育自体が自覚的に追求するものではない。実利だけを動機や目的とすることは、教育本来のあり方ではないと指摘します。

池田氏は、現実のなかでの教育目的の功利化という傾向について、独自の教育目的論を発表しました。すなわち、教育目的は功利主義的色彩を乗り越え、人間の価値のために奉仕することを至上最高の目的とすべきである。教育の根本的な目的は、人間の道徳的な質と力を高めることであり、そうした人間であってこそ、人生の価値と意義をよりよく創造することができるとしました。それはつまり、教育の目的は国家、社会、政治、経済、世界および文明などにあるのではなく、人類がどう生きるべきか、人生をどう送るべきか、という人類最重要の課題を明らかにし、答えることにあるというのです。教育を通じて青少年の個性を自由自在に伸ばし、全面的に発達した人間に育てること、これらは教育目的の重要な内容であると述べます。[7]

池田氏は長年にわたる教育実践のなかで、一貫して「教育は次世代をつくる偉大な事業である」という理念

をもち続けています。また、「教育こそ、文化の原動力であり、人間形成の根幹をなすものです。したがって、教育は、国家権力からも独立した、独自の立場で組織され、学問的にも追求されるものでなければならない」と指摘します。さらに池田氏は、教育におけるいかなる課題も、人間ひいては生命の尊厳という普遍的な立場から出発し、そして再びこの立場に回帰しなければならないと強調します。[8] ここからも、池田氏が貫く教育の信念は、人生の意義の追求と功利主義に対する批判であることが見て取れます。

池田氏の教育目的論は、氏の教育思想のなかで重要な構成部分をなし、創価教育体系の重要な指針となっています。現在、誰の目にもはっきりとしているように、創価幼稚園、創価学園、および創価大学において、池田氏の教育目的論は、すでに人々の心に深く根づき、効果的な教育実践が行われています。そして、この取り組みにより、これらの教育諸機関は、日本のひいては世界の教育界における一輪の稀有な花となっているのです。

3　比較と分析

デューイと池田氏の教育目的論を総合して考察すると、両者の間には多くの共通点があることがわかります。第一に、デューイと池田氏は児童の成長と幸福を教育の最重要の目的としていることが挙げられます。デューイは、「児童中心」主義思想を最初に唱えたわけではありませんが、「児童中心」主義に賛同しています。デューイは、学校生活の組織は、あらゆる中心が児童のためになるよう、児童中心でなければならない、なぜならば、児童を中心とすることで、児童の本能とニーズが協調しつつ一致するからであり、ゆえに、学校生活のなかでは、児童が出発点であり、中心であり、目的である、としています。デューイは「われわれは児童の立場に立たなければならないし、児童から出発しなければならない」と強調します。[9] 池田氏は、「教育のための社会」を提唱し、教育を子どもの幸福のためという原点に立ち返らせ、学校教育の質に関心を寄せ、教育を中心として、一切の社会活動はすべて教育のた

めに展開されねばならないとし、教育の究極の目的は「子どもの幸福」であると主張します。[10]

第二に、デューイと池田大作氏の教育目的論は、既存の教育の弊害への批判の上に立って提起されたものです。既存の学校教育のありように対する批判から出発し、デューイは次のように指摘します。教育の目的は成長であり、すなわち、より多くのより良き教育を獲得することである。教育の目的は内的であり、外的に強要されたものではない。外的に強要された目的は、児童の経験から自由に発展したものではなく、外からの命令により強制的に決められたものである。したがって、外的な教育目的は、たんに名義上の教育目的にすぎず、児童自身の目的ではない。それはたんに他人が目的を比較し隠ぺいする手段に至るだけである、と。同じように、池田氏も現代教育の功利主義に対して鋭く批判する一方で、これは悲しむべき状況であることを認めています。それは学問が政治や経済の手段となり、本来あるべき主体性や尊厳性を失い、それと同時に「いかなる知識が最も価値あるものか」という基準が主客転倒し、学問に打ち込む人間を知識と技術の奴隷にしてしまう。そして、教育の本来の目的は人間の育成にあり、実利の追求ではないと強く指摘しています。

第三に、両者の教育目的論は、現在の教育に大きな影響を与えています。デューイの教育目的論にせよ、池田氏の教育目的論にせよ、伝統的な教育目的に批判を加え、正しており、積極的な意義をもっています。デューイと池田氏は、伝統的な教育は、ある種の功利主義教育であり、このような教育目的は、教育を予備的なもので、将来役立つものを学習し、獲得するものと見なしており、このような目的は、抽象的なものであると指摘します。伝統的な教育目的への両者の批判と指摘は、現在の教育改革のなかに蔓延する、功を焦るような教育現象に警鐘を鳴らすうえで、ある程度有益といえます。そしてまた、教育に関心を寄せる人々が、教育に内在する目的と外から強要される教育目的に対して、はっきりと区別できるようになります。このことは児童が外から強いられる心身へのプレッシ

ャーを緩和し、児童の心身ともの資質の総合的な発達に有益でしょう。また昨今の教育改革に対して、すぐれた理論的な参考を提供することによって、我々が授業に取り組むなかで、つねに内的な、あるいは外的な教育目的の違いに注意を払い、異なる教育目的の指導的役割をより望ましいかたちで発揮することができるようになるでしょう。要するに、いかなるときも、我々は真の教育目的を見失ってはならないのです。

〝地球一体化に応じた教育〟へと発展

最後に、デューイと池田大作氏の教育目的観には、ほかにもある発展的な関係が見られます。デューイの教育目的論は、おもに民族的な利益から出発し、民主的な意識をもった新しい世代の人材育成に着眼したもので、それによってデューイの描く民主主義的な社会理想を実現しようとしました。その目的はアメリカ資本主義という社会制度を改良するためでした。しかし、それは所詮、現代社会の物質文明と精神文明の基礎の上に立脚したもので、その価値は国家の境界を越えるだけのものでした。一方、池田氏の教育目的論については、日本の社会や教育の現状をおもな背景としているにもかかわらず、それは地球規模の利益から出発し、世界平和を希求する世界市民に着目し、調和の取れた国際社会を構築するため、世界平和推進のために奉仕するものです。

いかなる思想や理論も多少は社会発展の現状から制約を受け、多少は同時代の様相を映し出すものです。デューイの教育目的論の多くは、19世紀末から20世紀初頭における、国際情勢の特徴、アメリカ社会の発展状況や教育現状から制約を受けています。もし仮にデューイが、経済がグローバル化、地球一体化した今日まで生き延びていたとしたら、彼の視点や思索もおそらくアメリカという枠を越えて、地球規模の利益と発展に関心を寄せたことでしょう。したがって、ある意味において、池田氏の教育目的論は、デューイの教育目的論を現代社会において展開させたものであると結論づけられるのです。

注

（1）趙祥麟・王承緒『杜威教育論著選』上海：華東師範大学出版社、1981年、154頁／J・デューイ、河村望訳『デューイ＝ミード著作集9　民主主義と教育』東京：人間の科学新社、2000年、49-50頁、75頁、147頁参照。

（2）呉式顕『外国現代教育史』北京：人民教育出版社、1997年、49頁／前掲『デューイ＝ミード著作集9』121頁参照。

（3）前掲書、56頁。

（4）胡華忠「池田大作の『人間革命』における教育思想」、創価大学平和問題研究所紀要『平和・文化・教育』創刊号、2004年、3、4、137頁。

（5）前掲書、4、138頁。

（6）池田大作『人生寄語――池田大作箴言集』上海：上海社会科学出版社、1992年、113頁／池田大作『人生抄――池田大作箴言集』東京：聖教新聞社、1990年、205頁。

（7）池田大作『池田大作集』上海：遠東出版社、1997年、125頁。

（8）池田大作・松下幸之助『人生問答』北京：中国文聯出版社、2000年、330-353頁／池田大作・松下幸之助『人生問答（下）』東京：潮出版社、1983年、160頁。

（9）趙祥麟・王承緒『杜威教育論著選』上海：華東師範大学出版社、1981年、79頁／J・デューイ、河村望訳『デューイ＝ミード著作集8　明日の学校　子供とカリキュラム』東京：人間の科学新社、2000年、267頁参照。

（10）池田大作「21世紀：建設『為教育的社会』」（原題は『「教育のための社会」目指して』）、『学術研究』（7）、2001年、80-86頁。

（げん　せいりん／肇慶学院・外国語学院院長
池田大作研究所所長）
（訳・おおえ　へいわ／東洋哲学研究所委嘱研究員）

（本稿は2013年10月13日、東京新宿区の日本青年館で行われた講演をまとめたものです）